まざまな動物群および植物における性差の実態，代替戦術，今後の課題など． (TK)

□その他

リンネと博物学．—大場達之・斉藤明子（編）．1994．千葉県立中央博物館，千葉．222 pp. ¥2,000（税込）．現在千葉中央博で行われている特別展，「リンネと博物学—自然誌科学の源流」の図録．最高のナチュラリスト，リンネ（木村陽二郎），分類学の黎明期における生物分類と種概念（直海俊一郎）ほか，関係論文・エッセーが15篇掲載されている．「自然の体系」（初版）の訳など，魚類学者にとっても貴重な情報も数多く含まれている．進化学関係者からはすでに高い評価を受けている．博物館のミュージアムショップを通じて入手可能． (MM)

バイカル湖—古代湖のフィールドサイエンス．—森野浩・宮崎信之（編）．1994．東京大学出版会，東京．viii＋267 pp. ISBN4-13-066153-1. ¥3,502（税込）．世界で最も古く，最大の深度を誇り，「生きた進化の博物館」とも称されるバイカル湖を舞台にしたナチュラルヒストリーの本．1991年以降の国際共同研究の経緯と，地質，古環境，系統進化，生態系と物質循環・汚染など，幅広い研究成果と今後の課題をまとめている．このうち，水生動物の種多様性と生態，進化を扱った章（第4章）では，莫大な種数のプランクトン類の分布と群集動態，300種にも及ぶヨコエビ類の分類と由来，29種のカジカ類の生態と系統進化，および淡水に生息する唯一の鰭脚類バイカルアザラシの形態・生態と現生種との類縁関係など，私たちにも直接関心のある話題が掲載されている． (AG)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
41(3): 350, 1994

New Catalog Numbers for the Type Specimens of *Dinematichthys randalli* and *D. megasoma*

New catalog numbers for the type specimens of the two bythitid species, *Dinematichthys randalli* and *D. megasoma* described by Machida (1994), are redesignated as follows. Institutional abbreviations follow Leviton et al. (1985).

	Cat. No. in the original description	New Cat. No.
Holotype of *D. randalli*	BPBM 28305-1	BPBM 28305
Paratype of *D. randalli*	BPBM 28305-2	BPBM 35788
Holotype of *D. megasoma*	NTM S. 11253-019-1	NTM S. 11253-019
Paratypes of *D. megasoma*	NTM S. 11253-019-2	NTM S. 11253-020
Paratype of *D. megasoma*	NTM S. 10417-023-1	NTM S. 10417-023

Exact locations which were not shown in the original description of *D. megasoma* are: Table Head, Cobowg Peninsula, Northern Territory—11°14.6′S, 132°10.7′E, and Dudley Point Reef, Darwin, Nothern Territory—12°25.2′S, 130°49.0′E (R. Williams, pers. comm.).

I thank J. E. Randall (BPBM) and R. Williams (NTM) for their information.

Literature Cited

Leviton, A. E., R. H. Gibbs, Jr., E. Heal and C. E. Dawson. 1985. Standards in herpetolgy and ichthyology: Part 1. Standard symbolic codes for institutional resource collections in herpetology and ichthyology. Copeia, 1985: 802–832.

Machida, Y. 1994. Descriptions of three new and one resurrected species of the bythitid genus *Dinematichthys* (Ophidiidae). Japan. J. Ichthyol., 40: 451–464.

（町田吉彦　Yoshihiko Machida：〒780 高知市曙町2-5-1　高知大学理学部生物学教室）

魚類学雑誌
41(3): 351, 1994

富永義昭博士を偲んで
Dr. Yoshiaki Tominaga (1936–1994)

日本魚類学会評議員であり，魚類学雑誌編集委員(1969–1992)であられた富永義昭さんは去る5月3日に脳内出血のため57歳で逝去されました．

富永さんは福岡県立修猶館高等学校を卒業(1955)され，東京大学理学部生物学科を卒業後，さらに大学院に進み，理学部の助手として三浦半島の油壺にある臨海実験所で勤務(1963–1966)し，1968年にハタンポ科魚類の研究で理学博士の学位を取得されました．

その後，東京大学の総合研究資料館において魚類の研究を続けると同時に，理学部の講師（非常勤）をしながら，家業である天洋水産，福岡運輸，福岡倉庫，横浜海運，富永事務所，札幌低温運輸などの株式会社の代表取締役あるいは社長として，まさに超人的な活躍をされました．福岡と東京をこまめに往復され，素早く頭を切り替えて生活しておられました．

私は1963年にミシガン大学の留学から帰国し，アメリカ合衆国国立自然史博物館のラクナー博士といっしょに油壺の臨海実験所を訪れ，初めて富永さんにお会いしました．その後，日本魚類学会が設立され，魚類学雑誌の編集を担当していた頃，富永さんの学位論文の印刷を手伝いながら，洞察の鋭さと自由にほとばしるアイディアの数々に敬服しながら交わりを深めてまいりました．

1969年から魚類学雑誌の編集委員をお願いし，その後23年間にわたって編集に力を尽くして下さいました．その甲斐あって，魚類学雑誌は国際的にも高く評価されるようになり，国外からの投稿者も増え，世界の魚類学者にとって無くてはならない存在にまで成長しました．

富永さんは編集には大変時間をかけ，原稿の内容を完全に理解するまで読んでから不要と思われる部分を削除し，親身になってすっきりした形に仕上げる努力を惜しまなかったため，しばしば著者と議論を闘わせていました．歯に衣を着せず，単刀直入に物をいう性格でしたので，若い日々には先輩の方々の原稿に遠慮なく手を入れることも多く，私の気を揉ませることもよくありました．

私とは趣味も性格も大いに違っていましたが，よく一緒に仕事をし，ともに語る日の多かったことを懐かしく思い出します．三省堂からの日本産魚類大辞典の出版，日本産魚類目録第一次，第二次資料の作成，また魚類学雑誌索引の刊行には私費を投じて坂本一男，白井　滋の両氏とともに努力されました．

同行したモイヤー博士の三宅島の研究所の訪問，ニュージーランドのウェリントン大学で開かれた第三回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議での発表など，ついこの間のことのように思い出されます．

富永さんの魚類学上の関心は多岐にわたり，ハタンポ科の解剖に基づく分類と系統の解明，スズキ目の類縁関係，鰾の後部の形態比較，コモリウオ，キントキダイとマトウダイ，アカタチ科とアマダイ科の研究などにも手をつけておられました．東大の魚類タイプ標本目録はやがて藍澤，白井，坂本氏の努力によって完成されるでしょう．資料の整理を通しての学問へのサービスにも熱心で東大総合研究資料館所蔵文献目録(1992)，富永義昭蔵書目録(1993)，冨山一郎博士蔵書目録（続行中）の作成にも力を尽くされました．1967年から一時期を除き専任教官のいない資料館の動物部門において，不足を私財で補いながら標本の維持・管理を行なってこられました．

富永さんは魚類の研究，日本魚類学会，魚類学雑誌をこよなく愛されると同時に，俳句，囲碁，コンピュータなどの上達が早く，最近は魚類の化石にまで興味を示しておられました．酒を愛し，煙草を愛し，冗談を愛した，自由奔放でユニークな魚類学者として，富永義昭博士，富永さん，おとみさん，Dr. Yoshiaki Tominagaのお名前と業績は国内外の魚類研究者によって今後も永く語り継がれてゆくでありましょう．

（上野輝彌　Teruya Uyeno：〒169 東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館分館）

魚類学雑誌
41(3): 352-355, 1994

フィリピンの魚類に関する文献について
Literature on Fishes of the Philippines

ある日突然魚を突きつけられて「この魚は何という種類ですか？」と尋ねられたとしよう．魚類を研究しているあなたは，どういう道筋で答えを捜すでしょうか．

①まずは何目の何科に属するのかを，今までの知識を総動員して大体の検討をつけるでしょう．と同時に，

②きっとあなたは魚を持ち込んだ人に聞くでしょう，「これはどこで採られた魚ですか？」と．

ここで4通りのケースが考えられます．

1) ①も②もハッキリしている．
2) ①は大体の検討がつくが，②はわからない．
3) ①はわからないが，②はハッキリしている．
4) ①も②もハッキリしない．

さらに①と②に関する文献，すなわち

①ある特定の魚類分類群の分類学的研究，と

②ある特定の地域の魚類の分類学的研究

の有る・無しによっても上の4通りのケースがあてはまります．

これら4通りのうち，4) の場合にはどうしましょう？知り合いの魚類分類学に精通している人にソーッと標本を見てもらうか，「オレは魚類の分類が専門ではない！」あるいは魚類の分類を専門としている人であれば「魚類の同定は分類学なんかじゃない！」などと言って開き直るしかないでしょう（誤解を招くといけないので，ここで馬渡［1994年：動物分類学の論理 多様性を認識する方法，東京大学出版会の (5) 同定作業，20～22ページ］を参照して下さい）．

少し横道にそれましたが，同定作業としては①からのアプローチ，すなわち 1) と 2) のケースが正道かもしれません（再度，馬渡［上記文献］を参照して下さい）．しかし，『学問に王道無し』とはいいますが，②の“ある特定の地域の魚類の分類学的研究”が有ることによって，目の前に王道が開かれることは間違いないでしょう．また 3) のケースでも何かの手がかりが得られるでしょう．

少し強引に引っ張ってきたというキライはありますが，ここで特定の地域―そう東南アジアです．

「東南アジアの魚類を同定する際に手元に必要とする文献を挙げて下さい」という内容のアンケートを，私の所属する東京水産大学魚類学研究室の学生さんにお願いしました．結果だけを，人気の高い順に並べますと：

1. Weber and de Beaufort の Indo-Australian Archipelago;
2. Smith のタイの淡水魚;
3. Kottelat et al. の西インドネシアとスラウェシの淡水魚;
4. Roberts の西ボルネオの淡水魚，FAO の Species Identification Sheets, Taki のラオスの魚類でした．

研究室の教授の影響からか，淡水魚に関するものが多いという偏った結果にはなりましたが，フィリピンの魚類に関する文献はひとつも登場しませんでした．

やっとのことでフィリピンに到達しました．

フィリピンは西太平洋の島嶼部中央に位置し，北と南は日本と大スンダ列島にはさまれ，また西側は南シナ海を介して東南アジア大陸部に面しています．ここで上に掲げた文献から FAO のものを除き，さらに日本のものを加えれば，そのままフィリピンを取り巻く地理的な位置関係に一致することに気が付きます．ということは，フィリピンの魚類に関する文献があれば，東南アジアという特定の地域の魚類の同定作業が楽になるとも考えられます．実際，私がフィリピンに三年間滞在したこともあってか，「フィリピンの魚類を同定するのに何か良い文献はないですか？」と尋ねられたことも一度ならずあります．

さて前口上はこのくらいにします．

ここでは，今年の 6, 7, 8 月とフィリピンのイロイロにある東南アジア漁業開発センター (SEAFDEC) に滞在する機会がありましたので，その間に目にしたフィリピンの魚類に関する文献を紹介しますが，その前に二，三のお断わりをしておきます．

まず，上記①の文献には目もくれません．これはある特定の分類群で地域的にフィリピンを含むとなると膨大な数になるからです．ここではフィリピンに限ったある特定の分類群に関する二，三の論文だけを紹介します．

さらに以下の2つの論文については割愛します．これは，前者についてはその一部しか目を通していないという理由で，また後者については膨大な数であるとともに復刻版も出版されているからです．

Bull. U.S. Natn. Mus., 100 に掲載されている Contributions to the biology of the Philippine Archipelago and adjacent regions のシリーズ

Philippine Journal of Science に掲載された魚類関係の論文（1908～1958年の論文については the Smithsonian Institution-TFH Publications, Inc. から The Philippine Journal of Science Ichthyological Papers として 1969 年

に3巻の復刻版が出版されている）

さらにここでは，チェックリストや魚類検索に有用な文献だけでなく，魚名や魚類にまつわる文献についても簡単に紹介します．

1) チェックリスト

Jordan, D. S. and R. E. Richardson. 1910. Checklist of the Species of Fishes Known from the Philippine Archipelago. Publ. No. 1, Department of Interior, Bureau of Science, Manila. 78 pp.

フィリピンの魚類に関する最初の本格的なチェックリスト．合計830種がリストされている．なお，本文献は1965年に The Philippine Bureau of Science, Monographic Publications of Fishes の中の1論文として，the Smithsonian Institution-TFH Publications, Inc. から復刻版が出版されている．

Herre, A. W. C. T. 1934. The Fishes of the Herre 1931 Philippine Expedition with Description of 17 New Species. The Newspaper Enterprise Ltd., Hong Kong. 196 pp.

合計1021種が紹介されている．そのうち34種の新種（うち17種はすでに Copeia に発表済み）と74種のフィリピン初記録種が含まれている．

Herre, A. W. C. T. 1953. Check List of Philippine Fishes. Research Report 20, Fish and Wildlife Service, U.S. Department of the Interior. 977 pp.

フィリピンの魚類をチェックする際には必ず使われる文献．合計2175種の魚類がリストされている．

2) 魚類を検索する

Rau, N. and A. Rau. 1980. Commercial Marine Fishes of the Central Philippines (Bony Fishes). GTZ (German Agency for Technical Cooperation). 623 pp.

ドイツの技術協力庁（GTZ：日本の JICA—国際協力事業団—に相当する）から出版された本．主にセブ島周辺の魚類，約550種を紹介している．このうち400種は，著者らによると，FAO の Species Identification Sheets for Fishery Purposes (1974) に含まれていないとの事である．著者らが述べているように，本書は魚類の safe identification を手助けする本として位置づけられている．

科の検索は外形に基づいて行うが，各科ごとに線画が添えられている．アルファベット順に各科の特徴を紹介し，さらに科内の属，種をアルファベット順に並べて紹介している．属，種への検索表はないが，各種ごとに線画がついている．

Schroeder, R. E. 1980. Philippine Shore Fishes of the Western Sulu Sea. National Media Production Center, Manila, Philippines. xvi+266 pp.

著者は1976年から約3年間，パラワン島の南パラワン地区漁業局に，US Peace Corp の1員として勤務した．本書は主にパラワン島の沿岸域で採集した魚類によって構成されている．合計105科，525種がカラー写真とともに紹介されている．前半は黒色をバックにしたカラー写真，後半は各種の説明で，系統順に学名，英名，タガログとヴィサヤ地方での俗名に続いて，Ecology, Diagnosis, Standard length の解説がある．

Umali, A. F. 1936. Edible Fishes of Manila. Popular Bull., No. 6, Commonwealth of the Philippines, Department of Agriculture and Commerce, Manila, Manila Bureau of Printing. 192 pp.

題名通り，マニラ（とくに市場）で採集した魚類のリストとその解説書．古いわりにはよく調べられており，各科への検索表と各科ごとに種の検索表がついている．合計145種を紹介しているが，種ごとに線画と簡単な説明がある．

著者によれば，本書の対象は一般の魚類消費者，漁業者，流通業者，遊漁者などである．Introduction では，当時（1930年代）のマニラの市場の様子や，主要魚種の水揚げ，流通事情なども紹介されており，なかなか興味深い．

Conlu, P. V. 1986. Fishes: Guide to Philippine Flora and Fauna, Volume IX. Natural Resources Management Center, Ministry of Natural Resources, and University of the Philippines. xx+495 pp.

フィリピンの動植物相を紹介するシリーズ本の第9弾（全体で12巻まである）．本書では，主に1976年から1980年のフィリピン各地での現地調査に基づいて，合計427種（21目，112科，235属）の魚類を紹介している．著者は現在フィリピン大学ヴィサヤ校 (University of the Philippines in the Visayas) の水産学部長．

科，属，種の検索表はないが（ただし本書の最後の部分に Pictorial Key to the Families of Philippine Fishes という項を設け各科の簡単な線画を載せている），各種について，学名，英名と地方名，簡単な形態の記載，生物学，分布，経済的有用性などを，線画あるいは他文献からの複写絵とともに紹介している．

本文ではいきなり種ごとに情報を羅列しているが，Introduction では Taxonomic Listing of Species という表を設け，各種の所属する属，科，亜目，目の情報を提供している．さらに Philippine Ichthyological Literature, Philippine Fishes, Freshwater Species, Endemic Species, Vanishing Species などの項目を設け，フィリピンにおける魚類の概要を説明しているのは，なかなか有用である．ちなみに本書で紹介している 427 種（これには 27 種のフィリピン初記録を含む）は，これまでにフィリピンから報告された魚種の約 20%であるとしている．

Anonymous. 1978. Handbook on Field Identification of Fishes, Crustaceans, Molluscs, Shells, and Important Aquatic Plants. SCS manual No. 1, Department of Natural Resources, BFAR and South China Sea Fisheries Development and Coordinating Programme, FAO/UNDP/CIDA. xi + 60 pp.

前文では水産生物のグルーピングと，それに対応する英名，学名，フィリピン語のリストがある．本文では 1 ページに 1～2 種の線画と簡単な特徴を記しているが，本文 60 ページのうち魚類は 43 ページを占める．

Herre, A. W. 1927. Gobies of the Philippines and the China Sea. Monograph 23, Monographs of the Bureau of Science, Manila, Philippine Islands. 352 pp., 30 pls.

77 属 172 種のハゼが紹介されている．本文献は 1965 年に The Philippine Bureau of Science, Monographic Publications of Fishes の中の 1 論文として，the Smithsonian Institution-TFH Publications, Inc. から復刻版が出版されている．

Montalban, H. R. 1927. Pomacentridae of the Philippine Islands. Monograph 24, Monographs of the Bureau of Science, Manila, Philippine Islands. 117 pp., 19 pls.

78 種のスズメダイ科魚類が紹介されている．本文献は 1965 年に The Philippine Bureau of Science, Monographic Publications of Fishes の中の 1 論文として，the Smithsonian Institution-TFH Publications, Inc. から復刻版が出版されている．

Kohno, H., M. Duray and P. Sunyoto. 1990. A Field Guide to Groupers of Southeast Asia. Central Research Institute for Fisheries (Indonesia), PHP/KAN/PT. No. 14/1990 Jakarta. 27 pp.

合計 46 種のハタ（ハタ亜科）が紹介されている．文献のタイトルは東南アジアのハタで，またインドネシアで出版された文献ではあるが，ほとんどがフィリピンで採集した個体に基づいているため，ここに紹介する．

前半は体色とそのパターンによる検索で各種類が同定されるように工夫されており，後半はすべての種類のカラー写真からなる．各種類については簡単な形態的特徴も述べられている．文献は general aspects, taxonomy, aquaculture-general, aquaculture aspects of respective groupers に分けて纏められており，なかなか便利である．

3) 魚名を調べる

Herre, A. W. 1948. English and Local Common Names of Philippine Fishes. Circular 14, U.S. Dept. Interior, Fish and Wildl. Serv. vi + 128 pp.

フィリピン産の魚類について，その英語名からタガログなどフィリピンの 10 言語による俗名および学名が引ける．また俗名から英語，学名の検索も可能．

Anonymous. 1984. Standardized names of edible Philippine fish. Philippine Fisheries Annual, Philippine Fisheries Development Authority, 1984: 82–85.

フィリピン漁業開発局 (PFDA) から年に 1 回刊行される定期刊行物の中の 1 論文．フィリピン産魚類の英語—主要言語（都市）での地方名—学名の一覧表．フィリピンの統計はここに示された地方名に依っていることが多い．さらに本稿に続いて (86–98 pp.), 魚種別の主要漁港での水揚げ量などの水産統計が示されている．

4) その他の文献

Umali, A. F. 1950. Guide to the Classification of Fishing Gear in the Philippines. Research Report 17, Fish and Wildl. Serv., U.S. Dept. of the Interior. iv + 165 pp.

フィリピンでの主要な漁具の説明書．主要漁具の分類，イラスト，各部分の名称などが以下の見出しに沿って，要領よくかなり詳しく研究されている：Basic classification of fishing gear; Key to the identification of classes of fishing gear; Definitions and illustrations of classes of fishing gear; Classification of Philippine fishing gear; Glossary of Philippine fishing gear.

de Castro, L. V. 1987. The fishlore of Western Visayas. Danyag, Journal of Studies in the Social Sciences and Humanities, Education, and the Basic and Applied Sciences, University of the Philippines in the Visayas, III(1/2): 90–109.

西ヴィサヤ地方（パナイ島，ネグロス島などからなる）に伝わる魚にまつわる伝説の集大成．

Herre, A. W. 1935. Philippine Fish Tales. Oriental Commercial Company, Inc. xix+302 pp.（1952年に D. P. Perez Company, Manila が復刻版を出している）.

フィリピンの魚を紹介する本．対象は子供たちあるいは大人になった元子供たち．魚をグループごとに取り上げ，その生物学だけでなく，人との関わりやそれにまつわる話などをやさしく解説している．写真，絵も多く使われ，また所々に Words for study と Questions が設けられ，読みながら魚のことを勉強するように工夫されている（例えばハタの項の後ろには，Questions として「Describe the lapo-lapo（ハタの地方名）」とか「Why is the large lapo-lapo greatly feared by fishermen?」とかの設問がある）.

Herre, A. W. 1938. Stories of Philippine Fishes. Oriental Commercial Company, Inc. xx+288 pp.（1952年に D. P. Perez Company, Manila が復刻版を出している）.

フィリピンの Agapito という少年を主役とした物語．海，渚，砂浜，そして熱帯の魚たちと少年との触れ合いを，物語として綴った本．対象は小学生位で，各章には問題が設定されており，楽しみながら勉強する副読本といった本．

本書の成立ちは，著者がフィリピンでの魚類の研究をとおして学んだサカナたちの生活にヒントを得て，少しづつ書きためたものであるという（詩もちりばめられている）．本書の Preface を読むと，Herre という人がいかにフィリピンの自然，人々を愛していたのかがよくわかる（例えば，「世界中でフィリピンほど美しくまた奇抜な魚が見られる所はない」とか「色々な地方の漁師，真珠採りの潜水夫だけでなく農家の人々から多くのことを学んだ」とか…）.

これらの文献がフィリピンの魚類に関するもののすべてであるとは考えていません．むしろ今回は短期間に私の目に触れたものを収集したもので，まだまだ有用な文献があるものと思います．読者の皆さんのお手元にも，「なんだ，これも知らないのか」とか「私はコレでフィリピンの魚類を同定しました」といった文献がありましたら，是非ともお教えください．

なお最後になりましたが，文献の収集にご協力いただいた東京水産大学魚類学研究室の多紀保彦教授と学生の皆さん，国立科学博物館の松浦啓一博士および東南アジア漁業開発センター図書館の Ms. Amelia Arisola に深謝いたします．

（河野　博　Hiroshi Kohno：〒108 東京都港区
港南4-5-7　東京水産大学魚類学研究室）

会　　記・Proceedings

魚類学雑誌
41(3): 355-358, 1994

1994年度第1回役員会

1994年5月12日（木）．於　東京水産大学資源育成学科会議室．出席者：沖山，尼岡，松浦，佐野，宮，河野，馬場，大竹，林，瀬能，藤田．

役員会のメンバーが大幅に代わったため，自己紹介後に役員会が開かれた．

1. 前回議事録の確認．
2. 報告事項　会長：国際生物学賞の候補研究者（系統・分類分野）として，名誉会員の John E. Randall 博士を推薦した．編集委員，評議員で活躍された富永義昭氏が5月3日に逝去された．ご冥福を祈るとともに，学会から弔電を喪主にさしあげた．編集：41巻1号は5月20日発行の予定．掲載論文15篇．手持ち原稿53篇．会計：1994年度年会収支決算報告．
3. 1994年度年会の反省：総会出席者が少ないための対策として講演後に引き続いて総会を開いたが，例年と変わらず，今後の検討が必要．サテライト研究集会の企画を魚雑で公募する．休憩室の騒音が講演室に影響しないような工夫，プロジェクターなどの機器の更新など意見が出され，今後検討することにした．
4. 魚類学雑誌が2年後に欧文誌，和文誌になるが，その表紙と journal 名をどうするか，次回の役員会ま